

「小泉八雲『茶碗の中』く終わらない怪談」

二〇二〇年一月二十五日報告者堤邦彦

(1)趣旨

日本の怪異談において怪異の正体は明かされるべきか、正体不明のまままでよいか。怪異の正体を暴きださなければ終わらない怪談とは。

㊦ 小泉八雲「茶碗の中」(1902刊『骨董』)の冒頭と結末

何処か古い塔の薄暗い螺旋階段を登ってみると、何も無い突き当たりの暗闇のただなかに、蜘蛛の巣がかかっているだけだったというのではないだろうか。あるいは、海岸の切り立った断崖ぞいの道を辿って行き、岩角を曲がった途端、何も無い絶壁の縁に立っていたようなことはあるだろうか。そういった経験のもつ感情的価値がいかに大きいかは——文学的観点からいえば——その時に味わった感覚の強烈さと、その感覚が残す記憶の鮮やかさが、何より雄弁に物語るものである。

さて日本の古い物語の本の中には、不思議にも、ほとんど同じような感情的効果をもたらす作品の断片がいくつか残されている。……作者が怠慢だったのかもしれないし、版元と口論したのかもしれない。あるいは急に呼びだされて書きかけの小机を離れ、そのまま再び戻らなかつたのかもしれない。不慮の死が文章の途中で筆を折らせたのかもしれない。しかし、本当のところは、なぜこれらの物語が未完のままになっているのか、もはや誰にもわからないのである。……その典型的な例を一つここにあげよう。

天和三年正月四日、といえは今から約二百二十年前のことだが、中川佐渡守が新年の挨拶に赴く途中で、江戸は本郷白山のある茶屋に供まわりの者達を連れて立ち寄った。一行がそこで休憩している間、殿のお供衆の一人で、関内という名の若党が喉の強い渴きをおぼえて、大振りの湯飲みから茶を注いだ。茶碗を取り上げ、口をつけようとするとその時、彼は突然、透明な黄色の液体のなかに自分のではない顔の形、顔の影が映っているのに気づいた。驚いて彼は後ろを振り返ったが、そばには誰もいなかった。茶碗の顔は髪型からすると若侍のようであった。奇妙なほどありありと映っていて、非常に端正な——まるで少女の顔のように繊細な——顔立ちだった。そして映っていたのは確かに生きている人間の顔のように見えた。目も唇も動いていたからである。この謎めいた幻像に当惑した関内は茶を捨て、注意深く茶碗を調べてみた。だがそれは何の変哲もない、ただの安物の湯飲みでしかなかった。彼は別の茶碗をみつめて、また茶を注いだ。すると再びその顔が茶の中に現われた。そこで彼は新しく茶をいれなおせた上で、改めて茶碗に注いだ。すると、今またその不思議な顔が現れ、今度は嘲けるような笑みを浮かべていた。しかし関内はじつと堪えて恐怖感を抑えつけた。「貴様が誰であろうと」、彼は口ごもりながら言った、「もはやだまされぬぞ」——そしてその茶を、顔も何もかも一気に飲み干した後、一行に連なって出掛けた。はたして霊を飲みこんだのだろうかといぶかしみながら。

その日の晩遅く、中川の屋敷に詰めて当直にあたっていると、見慣れぬ客人が音もなく部屋に入ってきたのに関内は驚いた。客は立派な身なりをした若侍で、関内の真向かいに座ると、軽くお辞儀をしてからこう述べた。

「式部平内と申します。——今日初めてお目にかかりました。……お気付きにならないようですね」

その男は極めて低い、だがよく通る声で話した。そして関内は自分の前に、あの同じ不気味で端正な顔を、彼が茶碗の中に見て飲み込んでしまった幻像と同じ顔があるのを認めて仰天した。その顔は今も微笑んでいた、茶碗の中の幻影が微笑んでいたのと同じように。しかし、笑っている口許の上の両眼がまじろぎもせず、自分を見据えているのは挑戦的であり、また侮辱でもあった。

「はて、存じ上げませんか」関内は内心怒気を含んで冷ややかに答えた。「それよりも、当屋敷内に如何にして忍び入られたか、それを承りたい」

（封建時代には、大名の屋敷は制限を問わず嚴重に守りが置かれていたため、警備の者に許し難き不注意でもない限り、誰も取り次ぎなしに入ることはできなかった）

「ほう、御存じないとおっしゃるか！」いかにも皮肉な調子で、その声をあげると、訪問者は少しづつにじり寄ってきた。「御存じないと！ それでも貴殿は今朝、わざわざ拙者に手ひどい危害を加えられた……」

関内はとっさに腰の短刀<sup>(2)</sup>を掴み、男の喉元めがけて鋭く突いた。しかし刃先には何の手応えもない。と同時に、侵入者は音もなくさつと壁ぎわへ飛びのき、その壁をすりりと通り抜けてしまった。……壁に通った痕跡<sup>こんせき</sup>は何もなかった。まるで蠟燭<sup>ろうそく</sup>の明かりが行灯<sup>あんどん</sup>の紙を透かし通るように壁をすりぬけていったのだ。

関内がこの出来事を報告すると、それを聞いた朋輩<sup>ほうばい</sup>たちは驚き、首をかしげた。事件の時刻に屋敷を出入りする不審な人物を見かけた者はなく、また中川の家臣の中に「式部平内」の名を耳にしたことのある者も一人としていなかったのである。

翌晩、関内は非番のため両親とともに家にいた。すると夜もかなり更<sup>よ</sup>けたころ、見慣れぬ客人が数名訪ねて来て、その者たちが、お目にかかつて少し話をしたいと言っていることを告げられた。刀を手に、関内が玄関に出ていくと、そこには侍とおぼしき帯刀の男が三人、敷居の手前に立って待っていた。三人は恭<sup>まうや</sup>しく関内に頭を下げると、そのうちのひとりが言った。

「我々は松岡文五、土橋文五に岡村平六と申す。一同、式部平内殿の家来にごさる。我等の主人が昨夜貴殿を訪問されたおり、貴殿は主人を刀で切りつけられた。主人の傷深く、やむなく湯治場に行かれ治療にあたっておられるが、来月十六日にはお戻りになる。その時には

主人、加えられた危害に対し必ずや然るべく報復致すと……」

それ以上は聞かずに、いきなり関内は刀を抜くと、飛び出した。そして怪しげな者どもにむかって、右へ左にと切り掛かっていった。しかし三人の男は隣接する建物の壁に飛びつくと、影のように舞い上がっていった。そして……。

古い物語はここで途切れている。話の続きは誰かの頭のなかにあつたはずだが、それは百年以上も前に塵と化してしまった。

こうもあるかという結末をいくつか想像してみることはできよう。しかしどうも西洋人の想像力を満足させそうなものはひとつとしてない。むしろ読者自身の考えにまかせておいたほうがいいと私は思うのである。靈魂を飲み込むと、いったいどういう結果になるかを。

注

(1) 侍の従者で武士の身分の者をこのように称した。侍と若党の關係は騎士とその従者の關係と同じである。(原注)

(2) 侍が腰に差す一本の刀のうちの短い方。長い方は「カタナ」とよばれた。(原注)

① 原拠『新著聞集』（寛延二年・一七四四刊）

『新著聞集』 卷五第十奇怪篇

茶店の水碗若年の面を現す

天和四年正月四日に中川佐渡守殿年礼におハセし供に堀田小三郎といふ人まいり本江の白山の茶店に立より休らひしに召仕の関内といふ者水を飲けるが茶碗の中に最麗しき若年の顔うつりしかばいぶせくおもひ水ですて、又汲に顔の見えしかば是非なく飲てし其夜関内が部屋へ若衆来り昼八初て逢まいらせつ式部平内といふ者也。関内おとろき全く我ハ覚え侍らず扱表の門を八何として通り来れるぞや不審き物なり人にハあらじとおもひ抜うち切ければ逃したりしを厳しく追かくるに隣の境まで行て見うしなひし人々出合ひ其由を問ひ心得がたしとて扱やミぬ。翌晚関内に逢んとて人来る誰と問ハ式部平内が使ひ松岡平蔵岡村平六土橋文蔵といふ者なり思ひよりてまいりしものをいたハるまでこそなくとも手を負せるハいか、ぞや疵の養生に湯治したり来ル十六日にハ帰りなん其時恨をなすべしといふを見れば中々あらけなき形なり関内心得たりとて脇指をぬききりか、れば逃て件の境めまで行隣の壁に飛あがりて失侍りし後又も来らず。

※「茶碗の中」の原典である新著聞集の結末は「後又来らず」とするのみで、関

内の身に起こった災いや怪異の原因について一切語らない。八雲には、この点  
が「途中で終わっている物語」と解釈された。

⑦ 小林正樹監督の映画『怪談』（1965）第4話「茶碗の中」

※明治二年の正月。書きかけの奇談を机の上に置いたまま消えた戯作者、訪ねて

きた本屋が水かめの水面に浮かぶ各社の苦悶の姿を目にする結末。

結末をつける会談への転換。

⑤ 水鏡に浮かぶ見知らぬ人影のモチーフ

・『新耳袋』

・小野不由美『鬼談百景』『剃刀』

洗面器の水面に中年の男、驚き剃刀を落とすと赤い血が浮かぶ

(同書の「横顔」も風呂の水面に現れた顔の奇談)

## (2) 明治文豪の怪異観と怪異の正体と泉鏡花

「一寸怪(ちよいとあやしい)」(明治25年『怪談会』所収)

怪談の種類も色々あって、理由のある怪談と、理由のない怪談とに別けてみ

よう、理由のあるというのは、例えば、因縁談、怨霊などという方で。後のは、

天狗、魔の仕業で、殆ど端睨すべからざるものを云う。これは北国辺に多くて、

関東には少ない様に思われる。

私は思うに、これは多分、この現世以外に、一つの別世界というような物が

あって、其処には例の魔だの天狗などという奴が居る、が偶々その連中が、吾々

人間の出入する道を通った時分に、人間の眼に映ずる。それは恰も、彗星が出

るような具合に、往々にして、見える。が、彗星なら、天文学者が既に何年目

に見えるかと悟っているが、御連中になると、そうはゆかない。何日何時か分ら

ぬ。且つ天の星の如く定った軌道というべきものもないから、何処で会おうか  
もしれない、ただほんの一瞬間の出来事と云って可い。ですから何日の何時頃、  
此処で見たから、もう一度見たいといっても、そうは行かぬ。川の流は同じで  
も、今のは前刻の水ではない。勿論この内にも、狐狸とか他の動物の仕業もあ  
ろうが、昔から言伝えの、例の逢魔が時の、九時から十一時、それに丑満つと  
いうような嫌な時刻がある、この時刻になると、何だか、人間が居る世界へ、  
例の別世界の連中が、時々顔を出したがる。昔からこの刻限を利用して、魔の  
居るのを実験する、方法があると云ったようなことを過般仲の町で怪談会の夜  
中に沼田さんが話をされたのを、例の「膝摩り」とか「本叩き」といったもの  
で。

「膝摩り」というのは、丑満頃、人が四人で、床の間なしの八畳座敷の四隅か  
ら、各一人ずつ同時に中央へ出て来て、中央で四人出会ったところで、皆がひ  
ったり座る、勿論室の内は燈をつけず暗黒にしておく、其処で先ず四人の内  
一人が、次の人の名を呼んで、自分の手を、呼んだ人の膝へ置く、呼ばれた人  
は必ず、返事をして、また同じ方法で、次の人の膝へ手を置くという風にして、  
段々順を廻すと、恰度その内に一人返事をしないで座っている人が一人増える  
そう。

※人間の知恵でははかり知ることが出来ない魔界の存在を怪談の素材にする

泉鏡花作品（『高野聖』『夜叉が池』など）

### (3) 怪異の正体を求める江戸怪談

※不思議なる事象の理解を試みる江戸の知

㊦ 根岸鎮衛『耳囊』（文化二年・1814）より

番町にて奇物に逢ふ事（耳囊卷之四）

豫が一族なる牛奥氏壯年の折から、相番より急用申來、秋夜風雨強き夜、一侍を召連番町馬場の近所を通りしに、前後往來も絶る程の大雨にて、挑燈一つを不吹消やう桐油の陰にして通りしに、道の側に女子と見へてうづくまり居しが、合羽やうの物を着、傘・笠の類ひも見へず、睨と女とも見へず、合點行ざる様子故、右の際を行過しに、召連たる侍、「あれは何ならんと得と見可申哉」と言しが、「いらざるもの、よしを答へしに、折節挑燈を持たる足輕使體の者兩人脇道より來る故、右の跡に付元來し道へ立戻り、彼様子を見んとせしに、始見し所に何にても不見、四方打はなれたる道なれば、何方へ行べきやうもなしと口ずさみ歸りしが、門へ入らんとせし頃頻に寒くせしが、翌日より瘡を煩ひ廿日程なやみしが、召連し者も同様寒くして熱病を廿日程煩ひけるとや。瘡癩の氣の雨中に形容をなしたるならん。

㊦ 杉浦日向子『百物語』



㊧ 京極夏彦『旧談』の小細工

「うづくまる」のタイトルのように、熱を出して「うづくま」った主人公を見ていた友人がその姿を化け物と見誤る落ちをわざわざ追加して、怪異などあるといえばある……といった結末に落ち着かせる。



少し戻つて確認してみたが、やはり誰もいない。それらしいものも何も無い。ただ雨が降っているだけだった。

不可解ではあったが、そこにそうしている訳にも行かず、気に懸けて貰ったことに対する礼を足軽風の男たちに言い、Uさんは仕事場へ向かった。供侍は変だ、変だとしきりに首を傾げた。

仕事場の門前に着いた時、Uさんは大変な寒気を覚え、意識が遠退いたのだそうだった。熱があつたんですよ、と言つてUさんは笑つた。

迎えに出て来た同僚が慌てて介抱してくれたのだが、結局翌日から高熱を發して病みつき、Uさんは二十日間も床に臥してしまつたという。

瘡にかかつたのだそうだった。秋口の夜中に雨の中右往左往していた所為でしょうとUさんは語つた。

一緒にいた供侍も、Uさん同様二十日ばかり寝込んでしまつたのだそうだった。

「お供の侍はね、あれは、瘴癘の気が雨の中に凝り固まつたものだったんです——なんて、いまだに言うんですがね、さてどうでしょうな。出来過ぎているように思いますね。それだと、伝染病を振り撒く疫病神が、雨の中にうずくまつていたということになるでしょう。それは——どうかと思いますね」

それよりね、とUさんは続けた。

介抱してくれた同僚は後々、語り種のようにこう言うのだそうだった。

——あの夜あんたたちを見つけた時は、それは驚いたなあ。一瞬、化け物かと思つたよ。なんせ雨の中、門前に二人でうずくまつているんだから。

「うずくまつていたんですよ、私たちも」

Uさんはそう言つて、もう一度笑つた。

